

小学校家庭科の授業力形成における模擬授業の意義

山口 明美

I. はじめに

小学校教師を希望する教育実習未体験の学生を対象として、教職実践演習で教員として求められる4つの事項^①のうち、教員に求められる資質である教科、保育内容等の指導力に関する事項に焦点を絞り、なかでも家庭科の授業力（指導力）を育成するため模擬授業の効果に関する検討を行ってきた。その結果授業を実施するにあたり学習指導案の作成の重要性を理解するとともに、題材目標、到達度目標を明確にすること、本時の授業の流れを検討する際、児童の実態や行動、反応などをイメージして作成することの重要性を95%以上の学生が感じていた。

また、95%の学生が教材研究を行う際、何を教えなければならないか、どのような力をつけさせたいのか、またどのように教えていくのかをイメージしながら教材研究を行い、それが、発問・指示・板書・説明などを十分吟味する結果となっている。

模擬授業の実際については、ほとんどの学生が指導のねらいが明確であることが大切であり、授業を通して児童自らが課題を見つけ、解決していくための力をつけられるような授業の実践が大切であること、また授業者の話し方、態度が児童に影響を与える要因となることを感じていた。20分であるが模擬授業を一人で実施する意義を感じるとともに授業創りのポイントや楽しさを体得し、授業を観る目が鍛えられるという結果を得た。これらの結果から、少なくとも時間に関わらず個人で模擬授業を行うことは、授業力を育成する目的を十分果たし得るものと考えられる。初等・中等の教育現場にある教員であっても、自分の授業をより良いものにしていくために授業研究を継続的に重ね、自己研鑽に励んでいるのである。例えば、授業の公開、授業の参観、教材研究を深める、実践記録を残す、児童生徒に授業評価をさせるなどである。これらを考え

ると、教育実習未経験の学生にとって模擬授業は教員へのモチベーションを高める大きな力にも成っていると考える。

教材研究において「授業は児童の目的意識や多様な考えを生みだすために学習の流れが分かりやすく、児童に理解できるように計画されていることは大切」と考えている学生が多いことから、教科の特徴とも言える多様なあり方、生き方を見いだすために授業を計画しようとしていることは確認できた。しかしながら、あくまでも模擬授業の対象者が同年齢の学生であるため授業の内容を理解し知識として知りえていること、発問内容や発言している言葉が曖昧であってもほぼ何を言わんとしているか理解できることなどを考えると学生の納得のいく模擬授業であっても十分できたと判断するのは問題であろう^②そこで、今回教育実習を終えた学生（模擬授業の実際でのアンケート対象者）を対象として教育実習において模擬授業と同じ効果が得られたのか、あるいは問題点は何かを明確にし、模擬授業が授業力を形成するために必要なものであるのか、その意義を検討した。

Ⅱ. 教育実習の実施

教育実習はほぼ5月半ばから6月にかけて3週間行われた。実習校での配置される学年は様々であり、5、6年生を担当する場合は家庭科の授業を実施することもある。しかし、多くの学生が家庭科の授業を行うことは少ないのが実情である。また、実習は学生の母校の受け入れによって実施されているため、地域は鹿児島県、熊本県、福岡県などである。しかし地域による指導の差は見られない。

教育実習の評価については、担当者に任されているため学校差があるのはやむを得ない。学生は担当指導者の指導を受け、教育者としての在り方、授業の構成や取り組み方、授業の進め方、児童との向き合い方など様々な状況の中で学びを深めているのが実際である。

Ⅲ. 教育実習の振り返りの方法

教育実習を実施したすべての学生に対して、実習終了後次のような質問紙調査を実施した。調査はすべての質問項目において、大変良い、良い、悪い、大変悪いの4つの項目から該当するものを一つ選択してもらい評価を行った。

質問項目

- ① 学習指導要領の目標を理解した上で1時間の指導内容を扱えた
- ② 単元全体における1時間の指導内容の位置づけができた
- ③ 本時の目標を具体的に設定できた
- ④ 目標に対応した評価が設定できた
- ⑤ 学習指導案作成の基本的な技術が備わっていると思えた
- ⑥ 指導内容に応じて適切な板書計画が立てられた
- ⑦ 授業開始時、児童が授業に取り組む体勢を迅速につくれた
- ⑧ 「導入―展開―まとめ」の流れがイメージできていた
- ⑨ 導入部で、児童の関心を得る工夫ができた
- ⑩ 発問は指導過程の中に適切に設定していた
- ⑪ 教科書の内容から話題を膨らませることができた
- ⑫ 授業にふさわしい適切な教材が準備できた
- ⑬ 指導過程にメリハリがつけられた
- ⑭ 授業の中で、児童との対話がとれていた
- ⑮ 児童の顔を見て、話ができた
- ⑯ 児童に出す指示内容は、明確にできた
- ⑰ 児童の学習状況を把握しながら授業を展開できた
- ⑱ 児童の集中力を維持できるような工夫ができた
- ⑲ 授業で扱った内容は、児童の実態にあった
- ⑳ 時間配分は適切にできた
- ㉑ 板書の文字は正確に書けた
- ㉒ 教材、教具の扱いはスムーズにできた

- ②③ 声は十分に出せた
 ②④ 言葉づかいは適切であった
 ②⑤ 授業最後のまとめは適切であった
 ②⑥ 児童の学習に対する評価は、授業の目標に即したものになっていた
 ②⑦ 授業実施後、自分の課題を分析できた

自由記述

教育実習を体験して、教科教育法で指導しておいてほしかった項目や事柄がありましたらご記入ください。

IV. 教育実習振り返りの調査結果と考察

実習終了後に平成 25 年（25 名）、平成 26 年（24 名）、平成 27 年（30 名）の教育実習履修者全員に調査を実施し、全員から回答を得た。4 項目の質問に対して 4 件法で回答してもらった。

質問項目を授業力形成の上から、授業の構成、教材・教具、授業の技能、教師のふるまい、授業の完成度の 5 つのカテゴリーに分類した^③。その結果を表 1～6 に示す。なお、大変悪いと評価した者が 1 % ならずであったため大変悪いは省略した。全体的に概ね良いと評価していた。

表 1 授業の構成について（%）

観 点 項 目		大変良い				良い				悪い			
		H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合
授 業 の 構 成	① 学習指導要領の目標を理解した上で 1 時間の指導内容を扱えた	28	17	17	21	72	71	77	73		12	6	6
	② 単元全体における 1 時間の指導内容の位置づけができた	48	33	27	36	48	67	70	62	4		3	2
	⑤ 学習指導案作成の基本的な技術が備わっていると思えた	24	13	17	18	64	54	66	61	12	33	17	21
	⑧ 「導入－展開－まとめ」の流れがイメージできていた	48	38	63	50	48	58	27	44	4	4	10	6
	⑩ 時間配分は適切にできた	16	17	20	18	60	54	44	53	24	29	33	29
	②⑤ 授業最後のまとめは適切であった	24	12	23	20	60	60	54	58	16	28	23	22

授業の構成については、学習指導要領の目標を理解した上で指導内容を扱い単元全体における指導内容を位置づけ、1時間の授業の流れをイメージして授業を構成し実施できたと評価した者が95%以上であった。これは各教科法の授業において学習指導要領の意味が取り扱われ、学生はその意義を理解できていると考えられる。その結果、学習指導要領を丁寧に読み込み、各教科単元の目標に反映させていると考えられる。また、時案の作成において単元全体における本時の位置づけを十分理解した上で授業の流れをイメージしながら学習指導案を作成する手立てが定着していると言える。

しかし、時間配分の適切さ、授業最後のまとめの適切さに関しては20%～30%の者が悪いと評価している。学習指導案の作成において、全体の流れをイメージしながら納得のいく指導案を作成したのであるが、目の前にいる児童の反応や行動にいかに対応していくかの技量や予測が不足していたことが伺える。さらに学習指導案作成の基本的な技術が備わっていないと感じている者が20%ほど存在する。これは、基本的な技術ということから書式の体裁や文字の大きさなど文書作成に関する指摘や指導を受けたと考えられる。

模擬授業の効果に関する検討を行った結果^②ではどのように指導すべきかなど指導方法に意識が向かい、授業のねらいが明確にできなかったという反省があったが、教育実習における授業においては「どんな力をつけたいのか」という指導目標や指導内容が設定され、その目標を達成するためにどのような指導をすべきかを考えて臨んでいることが伺える。これは、模擬授業の反省が十分生かされていると評価してよいと考える。

表2 教材・教具について (%)

観 点 項 目				大変良い				良い				悪い			
				H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合
教材 教具	⑫	授業にふさわしい適切な教材が準備できた		32	29	54	38	64	63	43	57	4	8	3	5
	⑬	授業で扱った内容は、児童の実態にあった		8	8	34	17	84	67	53	68	8	25	10	14
	⑭	教材、教具の扱いはスムーズにできた		8	50	30	29	76	29	63	56	16	21	7	15

表2は教材・教具についての評価であるが、すべての項目で良いと評価した者が85%であった。特に授業にふさわしい適切な教材が準備できたは95%の者が良いと評価している。児童の実態を理解するためにアンケートを利用するなどの工夫が見られたことから、実態を理解した上で児童の実態に合った適切な学習課題を提示し、児童の助けとなる教材や授業内容に即した教具を準備し授業に反映できたと考えられる。

教材研究とは、教える側が「教える材料としての研究を行う」という意味があるように、その中核となるのが「この1時間で何を教えるのか」を具体的に確かむことであると言える。授業構成で「どんな力をつけたいのか」という指導目標や指導内容が見えた授業ができたという評価をしていることから、このような評価となったと考える。

教材・教具は児童の思考を発展させるような工夫も大切である。例えば絵や写真のように伝えたい内容の具体物をはっきりと提示することで児童の驚きや疑問が生まれ、児童の思考をより一層深めることになるが今回その点の評価項目がないため果たしてそこまで工夫されていたのかの把握はできていない。

表3 授業の技能について (%)

観 点 項 目			大変良い				良い				悪い			
			H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合
授 業 の 技 能	⑦	授業開始時、児童が授業に取り組む体勢を迅速につくれた	52	21	46	40	32	58	47	46	16	21	7	15
	⑨	導入部で、児童の関心を得る工夫ができた	28	25	44	32	68	58	33	53	4	17	23	15
	⑪	教科書の内容から話題を膨らませることができた	24	17	23	21	40	46	40	42	32	37	37	35
	⑬	児童に出す指示内容は、明確にできた	24	12	20	19	56	46	47	50	20	42	33	32
	⑮	板書の文字は正確に書けた	36	50	37	41	40	33	43	39	24	13	20	19
	⑰	授業実施後、自分の課題を分析できた	64	71	70	68	36	29	30	32				

授業の技能の観点から分析すると、児童が授業に取り組む体勢を迅速につくれた、導入部で児童の関心を得る工夫ができたについては85%の学生が良い

との評価であった。これはお互いに関連するものであり、導入部での関心を得られるような工夫がよくできていた結果、取り組む姿勢もスムーズに取れたと考えられる。本時の授業に関心と意欲を児童にもたせる、つまり引き付ける授業にすることは当然授業者に求められることである。その意味で授業のつかみについては理解できていると考えてよいと思われる。一方、教科書の内容から話題を膨らませることができたについての項目は35%の学生が悪いと評価している。

これは教科書を教えるにとどまっており、教科書で教えるという発想が十分ではなかったと考えられる。つまり教科書を教えるだけであればある一面だけを学ぶことになるが、教科書で教えることができれば学びを通してさらに内容を深め、広げていけるのである。その発想が十分でないため指導研究、教材研究が不十分であったという結果になったのであろう。

また、児童に出す指示内容は、明確にできたについても32%の学生が悪いと評価している。発問内容や発問の仕方と関連するが、指導のねらいがはっきりしていること、学習内容や活動の見通しを教師自身が明確に持っていることが大切である。これが明確でなければ児童に出す指示内容が不明瞭となり、曖昧な表現になると考えられる。そのため授業の目標が達成できるような授業の工夫は必至である。

板書の文字は正確に書けたについては80%の学生が良いと評価しているが、20%の学生は悪いと評価している。文字は正しく書くというのは基本的なことであり、さらに美しい文字で書けることが望ましい。

授業後の課題分析は十分できており、経験を重ねることにより技術的な部分に関しては向上すると思われるが今後の研鑽が求められる。

表 4 教師の振る舞いについて (%)

観 点 項 目		大変良い				良い				悪い			
		H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合
教師の 振る舞い	⑬ 指導過程にメリハリがつけられた	16	13	13	14	60	54	54	56	24	33	33	30
	⑭ 授業の中で、児童との対話がとれていた	40	50	60	50	48	33	37	39	12	17	3	11
	⑮ 児童の顔を見て、話ができた	60	52	73	62	36	40	23	33	4	8	4	5
	⑯ 児童の集中力を維持できるような工夫ができた	12	8	20	13	60	63	43	55	28	25	37	30
	⑰ 声は十分に出せた	68	58	60	62	28	29	33	30	4	13	7	8
	⑱ 言葉づかいは適切であった	24	32	50	35	68	60	50	59	8	8		5

教師の振る舞いについての評価を表4に示す。児童との対話に心がけ、児童の顔を見て授業を進めることや声の発声には全体に聞き取れるような大きさで臨んだに関しては90%以上の学生が良かったと評価している。一方、授業のメリハリをつける、児童の集中力を維持するための工夫についての評価は低くなっている。この2点の項目については悪いと評価した者が30%を占めている。この点について問題点として考えられることは、児童の反応を読み取る力不足や授業の展開がパターン化され授業方法が単一化していることが指摘できる。また、集中力を高めるために児童の学習に対する関心・意欲を深める切り口、手段が少ないことを意味するのであろう。これまで模擬授業では学生が対象であるため、気づきにくかった視点であるといえる。

また、学生は教師の振る舞いつまり表情、目線、身振り手振りを交えた話し方、声の大きさ、立ち位置などで授業を良くも悪くもすることが十分わかった上で授業に取り組んでいることが分かる。

表5 授業の完成度について (%)

観 点 項 目			大変良い				良い				悪い			
			H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合	H 24	H 25	H 26	総 合
授 業 の 完 成 度	③	本時の目標を具体的に設定できた	40	38	60	46	48	54	37	46	12	8	3	8
	④	目標に対応した評価が設定できた	32	18	30	27	64	65	63	64	4	17	7	9
	⑥	指導内容に応じて適切な板書計画が立てられた	44	21	23	29	48	75	73	65	8	4	4	5
	⑩	発問は指導過程の中に適切に設定していた	20	63	20	34	44	33	50	42	36	4	30	23
	⑰	児童の学習状況を把握しながら授業を展開できた	28	8	30	22	44	54	50	49	28	38	17	28
	⑳	児童の学習に対する評価は、授業の目標に即したものであった	28	13	47	29	64	61	47	57	8	26	6	13

授業全体を振り返りその完成度を評価してもらった結果、本時の目標を具体的に設定できた、目標に対応した評価が設定できた、また指導内容に応じて適切な板書計画が立てられた、児童の学習に対する評価は授業の目標に即したのものになっていたの4項目については90%以上の学生が良いと評価している。その一方で発問は指導過程の中に適切に設定していた、児童の学習状況を把握しながら授業を展開できたについては72%が良いと評価し、30%近くの者が悪いと評価しており授業の技能と類似する傾向が見られた。特に発問はどのような授業にしたいのか、何を児童に求めるのかをイメージしながら発問の準備をしたにも拘らず適切ではなかったと感じている。これは自分の想像を超える児童の反応や授業の流れに対しての対応がうまくできなかったことを意味するのであろう。その意味で発問を吟味する必要性があることを認識できたと考える。これは児童の学習状況を把握しながら授業を展開する場合も同様のことが言える。特に一斉授業の場合では、児童一人ひとりがどこでつまづいているのか、どんなことを考えているのかということを把握することは難しいものである。グループ活動の場面においても、児童がどのようにに関わり合っているのかを一度に把握するのは困難であると思われる。そのためにも机間指導を取り入れるなどにより児童の様子を判断し、授業の流れをつかんだ上で授業を展開することが教師に求められる。その意味で臨機応変に対応する柔軟さと対応力が必要なのであろう。

表6 自由記述

項 目	記 述 例
授 業 の 構 成	指導案の細かい書式（カンマやスペースの取り方、文章構成について） 指導方法を生かすため子どもの発達段階について 板書計画について（提示物のみで終わらない仕方）
授 業 の 技 能	発問の仕方（発問の組み立て方） 子どもの関心を引きつける方法（児童を引き付ける導入） 子どもの意欲を引き出す言葉のかけ方 子どもの予想外の意見に対応する力をつける方法 授業のまとめの方法、工夫の仕方について
教師のふるまい	学年に応じた言葉使い 声の強弱について
授 業 の 完 成 度	個別支援方法について
その他（感想）	模擬授業におけるDVDの振り返りが役に立った 模擬授業の際に、学生と教師側から意見をもらえたことはよかった 一人で模擬授業を実施する意義は大きい 模擬授業の体験が大いに役に立った 模擬授業の体験は短くても一人でやっていると自信にもつながる 模擬授業の時から発問についてよく考え、臨めばよかったと思う 模擬授業の指導がとてもありがたかった

記述の項目で最も多かったのが授業の技能に関するものである。評価でも確認できたように基本的な授業方法、学習指導案にそった授業の進め方、あるいは教材・教具のあり方などについては模擬授業を通して育成されていることがわかる。一方、模擬授業の限界ともいえるが対象が学生から児童に変わることで、学生が考える予測外の言動、反応に対しての戸惑いが多くあったことが伺える。その意味で指導方法を生かすため子どもの発達段階についての学びが必要であると回答した学生がいたのであろう。児童の発達段階の理解は非常に重要であり児童理解なくしてよい授業は成り立たない。特に授業構成の核ともなる発問は重要な指導技術といえる。発問が練られた授業は教師側にとってはねらいに沿った授業展開ができ、児童の学習状況が把握しやすく、児童にとっては授業に参加している感じがし、考えることが楽しくなるのである。つまり、練られた発問は児童の思考を促進させ、気づきや発見が生まれやすい。また、学習内容の理解・定着を促進させ、問題解決力を育て児童を集中させることができるのである。それによって充実感・達成感が生まれ、授業や学習に対する意欲を高めることに繋がるのである。さらに児童の思考に合わせた発問を投げかけることが大切となってくることから教育実習において困難を感じるのは当

然のことと言えるだけではなく、模擬授業を体験したから直ぐにできる指導技術ではない。むしろ教育実習をとおして児童の関心をひきつけるためにはどのような工夫をすべきか、発問はどのように組み立てるべきか、予想外の児童の意見にどのように対応したら関心・意欲を育てることができるのか学びたいとの向上心が育成されたことは大変価値あることであると考えてる。

その他の感想で模擬授業の意義を体感した学生が大変多かったということは記載に値すると考える。

V. まとめ

模擬授業の効果に関する研究において、授業を実施するにあたり学習指導案の作成の重要性、また、教材研究を行う際、何を教えなければならないか、どのような力をつけさせたいのか、またどのように教えていくのかをイメージしながら教材研究を行うこと、授業を通して児童自らが課題を見つけ、解決していくための力をつけられるような授業の実践が大切であること、また授業者の話し方、態度が児童に影響を与える要因となることを感じていた。その意味で模擬授業は授業力を育成する目的を十分果たし得るものと考えられることを明らかにした。

今回、教育実習終了後の評価においても模擬授業での学びが十分生かされ、すべての項目においてよいと評価した学生が85%を占めていた。指導のねらいが明確である、学習課題が児童のものになっている、学習内容や活動の見通しを持たせることができる、児童への支援が適切にできる、児童の学ぶ意欲を高める、学習評価が適切であるなどの基本的な考え方を大切に、授業を構成しようとしていることから授業力形成における模擬授業の意義は十分あると言える。このことから模擬授業は授業力形成に重要であると確認したように、今回の結果がそれに対応していることも確認できた。さらに授業の構成において教育実習未体験時では、授業方法にのみ目が向き授業のねらいが明確にできなかったとの反省もあったが、教育実習では目標達成のための授業方法に傾注した授業実践となり反省が生かされたことが自己評価に表われていた。一方、児

童の理解の重要性や目の前にいる児童にふさわしい授業方法、声かけ、発問の仕方、意欲・関心を高めるための具体的な方法や技法について多くの学生が戸惑いを感じていた。その意味で模擬授業の限界も確認できた。学生の授業力形成において、模擬授業での学びを基礎とし、さらに教育実習の体験を通して教育の深さ、広さを獲得することにより確かな授業力は形成されていくと考える。

今回の質問調査の評価で学生は自己課題の発見・気づきがあり、自己の不足している知識、技能の補完の必要性を強く感じている点は高く評価でき、模擬授業での学びが十分に生きていると考える。教育実習は学生にとって教員へのモチベーションを高める大きな力にも成っていると考ええる。

引用文献

①教員としての実践的資質能力の有機的統合と形成を促す「教職実践演習」の実施と評価

岸田恵津、別惣淳二、南埜猛、山中一英、石野秀明著 兵庫教育大学
www.hyogo-u.ac.jp/riron/pdf/kishida.pdf

②家庭科授業力を育成する模擬授業の効果に関する検討

山口明美 鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要 第22号 P90 2016

③小学校教員養成のための模擬授業の効果に関する一考察：自己評価・観察者による評価を取り入れて

林 渉 東海学園大学研究紀要第18号 109～

The significance of microteaching in teaching skills of elementary

YAMAGUCHI Akemi

Abstract

Considering the significance, or for establishing teaching lessons on what you need. How question

study conducted with students completing the training for. As a result, 85% of the students are good

and appreciated.

To engage the learning teaching education practice as the basis. Students discover the self challenge

and point strongly feels the need for completion of the lack of self awareness, knowledge and skills

can be appreciated. I think it is enough to live in the teaching learning in that sense.

Class power in teaching 10 minutes has to be confirmed.

Keywords : home economics, teaching practice、Elementary school, experience teaching